

陽だまり色センチメンタル

征人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

太陽の光が差し込む穏やかな日。エルーンの少女はいつも通りの何気ない日常を歩んでいた。

しかし、ふとしたきっかけでその日常は変わってしまった。

意識していなかったはずの感情は自分の心を揺さぶり、やがてそれは拒絶と抵抗を生み出す。

けれども。苦しみながら導き出した答えは、単純で簡単なものだった。

自分の感情のすべてを受け入れた少女は、柔和に笑った。

陽だまりのような明るさを見せて「恋すること」への楽しさを知った。

これは、いつかどこかの世界で見た、とある少年少女たちの物語。

目次

| | |
|----------------|----|
| センのお願い | 1 |
| 逃走と日向ぼっこ | 18 |
| 締めつけられて、苦しみながら | 25 |
| そうして見つけた笑顔の答え | 42 |
| 陽だまり色のセンチメンタル | 69 |

センのお願い

「最近、団長さんと一緒に寝ているんです」

突然の爆弾発言を耳にして、目の前で座っていたジータは飲みかけのお茶を盛大にぶちまけた。

会話の中で唐突に発せられたカミングアウトはその場にいた全員の耳にも届いたらしく、センの発言で食堂が一瞬だけ凍りついたかと思えば、今度は異色に満ちた喧騒があたり一面に巻き起こった。

ある者は「ふ、不潔です！ 秩序の乱れです！ 是正の余地あります！」と怒りで顔を真っ赤にし、またある者は「団長……ついにネエちゃんの色を知ったか……」と哀愁のある顔でしみじみ語り「センちゃんずるーい！ お姉さんもグランちゃんと寝たーい！」などとふくれっ面で不満を漏らしたりする者もいて。

しまいには「一緒に寝る……これを騎士様たちのイメージに当てはめれば……当てはめ、はめ——カツハアアツ!? あああダメです駄目ですエツチすぎますうううううううあああああ!!」と極めて邪悪な思考に走らせる輩までいる。

大きく咳込んだジータを心配して、さきほどまでもくもくと食事を進めていたセンは

エルーンの耳をふわふわ揺らしながら慌てて立ち上がった。

「だつ、大丈夫ですか。ジータさん」

「だ、大丈夫。そ、それよりも。だんちよ……グランと一緒に寝てるって……」

「——つまりそれ、同衾よねえ？」

「えっ？ ——ひやつ?!」

背後からするりと手を回され、センが小さな悲鳴を上げた。

何事かと慌てて頭上を見上げると、そこには彼女を抱きしめながらニヤニヤと笑う

メーテラの姿があった。

その様子を見て、ジータが洩い顔に一転する。これはよからぬ質問をする前の顔だ。

大抵メーテラがこんな顔をする時に限って、いつの間にもやら下世話な話題になっていることが多い。

食堂中のすべての団員たちの疑問を払拭するために現れた厄介な輩は、センの頭に顎を乗せて笑みを崩さずにこう言う。

「で。団長と一緒に寝て、どうだったの？ 最近つてことは結構頻繁に寝てるってこと

よねえ〜？」

指先でセンの首元をくすぐりながら、やたらと煽情的な声色で訊ねてくる。

「く、くすぐりたいですよ〜」ともじもじしながらもセンは、問いかけられた質問に対

して

「どう、ですか？ うーん、えっとですな……」

グランと一緒に過ごしたであろう過去を振り返る。

その様子を鮮明に、はつきりと形どって思い出したセンは一言、

「……えへへ。すごく、気持ちよかったです」

きらりと八重歯を見せながら、そうはにかんだ。

その様子がまんざらでもない表情だったので、固唾を飲んでセンの言葉を待っていた食堂中に新たな騒然が叩きつけられた。

なかには団員同士の憩いの場だというのに、なぜか手元にあった武器の手入れを始める者たちもいたが——その憎悪の矛先は彼女ではなく自室にいるグランへと向けられている。

この場にグランがいなかったことは唯一の救いだが、私刑の執行される猶予がただ伸びただけなのは変わりない。近い未来グランは無残な死体となってグランサイファーの飛行甲板で発見されるだろう。

女性団員たちの黄色い声上がる半面で、おどろおどろしい妄執の嫉妬が渦巻くそこは文字通りの混沌（カオス）な空間に変貌していた。

そんな感情たちが色とりどりに飛び交う異質な場で、質問をしたメーターはよりいっ

その黄色い声を上げた。

それはそれは楽しそうに、素直なセンをぎゅっと抱きしめる。

「やーん！ センってばダイターン♪ うちの妹にもそんなくらしいの異性ネタが欲しいわー！」

「だ、大胆、でしょうか？ ……あつ、そうだ。それなら今度はみなさんも一緒に寝ませんか？ きつと一緒に寝たほうがもつと気持ちいいと思うんですよ。こないだもゆぐゆぐさんと一緒に寝ましたけど、その時も気持ちよかったです」

「うえっ!? センってそっちもイケちやう系!? っていうかまさかの同衾共枕!? 流石にそれはまずいわよ！ 秩序の騎空団に制裁されるわよこの艇！」

予想外のカウンターにメーテラが大きさに言葉を返す。当人としては雑魚寝の意味合いで言ったのだが、既に伝えたい言葉はあらぬ方向に曲解されて周囲に伝聞している。ざわめく周囲の原因が自分にあるとはさも知らず、センは聞きなれない用語に首を傾げ、ぼかんとした顔でメーテラを眺めていた。

失言に失言を重ねた状況に食堂中の負のボルテージが最高潮にまで達し、その中で一人、ようやく落ち着きを取り戻したジータはと言えば、聡明な頭脳で事態を把握し、グランの身を案じていた――

「(グラン……大丈夫……大丈夫だからね。

あなたの亡骸は、きちんとザンクティンゼルに返してあげるからね——！」
——わけではなく。

即座にカオスルーダーにジョブチェンジして、食堂内で武装をした団員たちを鼓舞し、グランに反旗を翻すのだった——。

話は数日前に戻る。



「——そこですー！」

研磨された巨大な爪が、唐突に地面から隆起した岩に向けて俊敏に振り下ろされる。攻撃に特化した大爪の一撃を受けて、奇襲を繰り出したはずの岩石は瞬く間に粉碎された。周囲に散っていくその様子を見て一先ずの不意打ちは回避出来たが、それでも油断はできない。強者はいつでも相手の慢心を突いて勝機を生み出す。よそ見でもしようものなら、気が付かぬうちに地に叩き伏せられてしまうだろう。

そんな強敵と相対しているが故に、センはいつもの温和そうな顔を強張らせて次の一手を待った。

隠す気など微塵もない「それ」の闘志は、間近に感じていた彼女の身体をぞくりと総

毛立たせ。

身震いするほどの威圧感はこの大地に芽吹く植物たちを支配する。

戦慄きとざわめきが不快な音楽として奏でられるその最中に混じって——殺気を感じた。

それをセンは敏感に反応する。その速度は上々。ほんの僅かな気配を感知したことに喜びを感じつつも、気を取り直して集中。次は周囲一帯に広がる森林からの攻撃だった。

めきめきと力強く成長していく蔦たちを我が子のように従わせながら、それらがセンに向けて次々と襲い掛かる。迎撃しようと爪を構えた彼女だったが、拘束しようとしてくる翠緑の蔦は鋼のような強度を持っていることを知っていたので、慌てた様子で退避行動を取った。

巻きつこうとしてくる蔦たちをあしらいながら、攻撃を仕掛けてくる本体に彼女は目をやる。

センの瞳に映る巨大な影は星晶獣ユグドラシル。無垢の賜物のような相貌からは想像ができないほどの苛烈な攻撃を繰り返す、ルーマシー群島の守護者だ。本来は穏やかで戦いを好まない性格なのだが、かつて幾度となく人々の手によつて利用され操られてきた過去を持つ。グランたち一行の前に望まぬ敵として現れ、その度に深い傷を負い、

ロゼッタの苦惱を生み出していた。

そして何度も交戦を繰り返して、彼女はグランが率いる騎空団にその身を置くことになつた。

違わぬ凄惨な過去に苛まれつつも、その心は厄災に挫けることなくいつまでも大地に残る大樹のようで。

真つ直ぐに突き進むグランたちにあてられ、純朴な顔で空を眺め、空に発つた——そのはずだつた。

追隨してくる自然の力は確かにユグドラシルから発せられて、それは仲間であるセンに向けられている。多くを語らず黙々とその指令を放つ彼女の真意はいざ知らず。しかしその攻撃を甘んじて受けるほど、センも受け身の性格ではない。

おぼつかない足取りで体勢を整えたかと思えば、軽やかなステップを踏みつつも安全域まで距離を取り、高強度の轟の射程外までその身を離して呼吸を整える。浅く、深く、心拍数と共和した呼吸を重ねて身体に漲る力の奔流を脚部に集中、上体の膂力を抜き、旋風を彷彿とする風の属性力を高めながら——センは疾駆の如く駆けだした。

「絶爪——いきますっ！」

その言葉を最後に、小さく身を屈めてセンは加速した。

さながらそれは疾風迅雷。うっすらと残影をその場に描きながらも超速度で移動す

る。

そんなセンを見てユグドラシルも迎撃の岩盤隆起を放つが、彼女は予め知っていたかのようにその一撃を回避、地面から隆起した岩を足場にして、標的の位置を把握したのち——まるで砲弾のような勢いで跳躍した。

思わぬ接近を許しそうになったユグドラシルだが、岩石の連撃はまだ続いている。剣山のような鋭さを持つ岩石の波状攻撃を駆使して彼女の行動を妨害するが、センはその妨害すらも好機に変えた。

自身に襲いかかる石塊を大爪で抉り、尖った部分を削いで更なる足場を形成する。空中でも襲い掛かる岩はもはやセンが目標に辿り着くためのサポートでしかない。その事実気付くのが寸遅かったユグドラシルは、次なる一手を見舞うために行動を起こそうとするが——それも時既に遅く。

気づけば、相手からの攻撃が届く範囲にまで侵入を許してしまっていた。

「はっ！」

一歩間違えれば、岩石が直撃して致命傷もありえるような回避の仕方だが。

「やっ！」

それでも、センは余裕の表情でユグドラシルの攻撃を躲す。

山々で育ち、生まれ持っていた天賦の才能をその努力で更に飛躍させながら。

「とうっー」

死の恐怖を全く感じさせることなく、彼女は楽しげに、踊るかにように空を駆ける。空の世界を、自由な世界をただひたすら、無邪気なままの心で楽しむように――。

ルーマシーの黒き森に差し込む日照がセンの装備する大爪を鈍く光らせ、それは一種の目くらましとなった。

その隙を彼女は逃さない。反射した陽光で視界を奪われ、動きが緩慢になったユグドラシルの油断をつき、抜いていたはずの上体に血液を促し、直後、背筋を凍らせるほどの殺気を至近距離で放った。

それにユグドラシルはびくりと気圧され、その硬直が攻撃の手を止めてしまう。

狙うには絶好の機会。終わらせるには十分の時間。

獲物を狩るために精通したベア・クロウが、喉元を食い破らんが如く空を切り裂く。

「これで終わらせます!! 百爪――」

センの必殺の一撃がユグドラシルに放たれようとした刹那で、互いの瞳が交差する。

心の奥底まで貫くようなユグドラシルの眼にセンの大きな姿はどう映っただろうか。

そして物言わぬ巨樹の化身を、その強烈な存在感をセンはどう思っただろうか。

しかし、その互いの思考は訪れるであろう未来に非情にも打ち砕かれた。

ユグドラシルが、先にその瞳を逸らしたのだ。

ぎゅつと瞳を瞑ってセンの攻撃を耐えようとするユグドラシルにはもう、戦意の欠片もない。

その様子を目にして、センはニツと笑うと――

「――着地、です」

小さく身を丸めて、くるくると空中で回転した後、彼女はユグドラシルの肩にふわりと足を落とした。

無事に目的の場所まで到達したのを確認して、センはわあつと喜びを露にする。いつまでも攻撃が来ないことを知り、恐る恐る瞳を開けたユグドラシルが目にしたのは、自分の肩で大きく万歳をするセンの姿だった。

「やりました〜！ ゆぐゆぐさんの肩に到着です〜！」

巨大化したユグドラシルの肩にちよこんと座ったセンが、切り株に座っていたグランに向けて大きく手を振る。首元にすり寄ってくるセンの動きがくすぐったかったのか、ユグドラシルはもじもじとしながらも笑っていた。

そんな姿を傍らで眺めていた団長ことグランは、顎に手を当てて感嘆の声を上げていた。

「やれやれ……まさか本当に攻撃をすり抜けて肩に乗るとはなあ」

ユグドラシルの力を借りて模擬訓練を行ったのはいいものの、誰の補助を受けること

もなく指定した場所に辿り着くとは思わなかった。「自分の力を試してみたい」とセンに切願されて行つた今回の訓練だが、危険そうなら直ぐにでもグランが援護に入る予定だった。しかしその心配は全くの杞憂のようで。ハラハラと眺めていたこちらがばかばかしく思えるほどの爽やかな笑顔を見せて、センはにこやかに手を振り続けていた。そうしてユグドラシルの手に乗つて大地に着いた後、センはぴよんつと地面に下りてそのまま――

「団長さ〜ん!」

傍にいたグランに勢いよく抱きついた。猫のように思い切り飛びかかつてくるものだからそのまま地面に倒れ込みそうになるもの、下腿にぐつと力を入れて耐える。とにかく耐える。ふわふわ揺れる灰色の髪が顔に触れるたびにくすぐつたくて思わず緩みそうになるが意地でも耐える。

「わわっ!? ちょ、ちよつとセン!」

「えへへ〜……団長さんっ。わたし、やりましたよ〜!」

「わ、わかつた! わかつたからちよつと離れてくれないか〜!」

ばたばたとグランが引き剥がそうとしても、よほど嬉しかったのか一向にしがみ付いて離れようとしない。

年頃の女性らしいふくらみが確かにセンから感じられて、それを実感する度にグラン

の顔が赤く染まりそうになる。けれども無邪気な彼女にそんな劣情を抱いているなんて思わせたくない。

そんな思春期真っ只中の団長がほとほとセンの扱いに困り果てていたら——そんな彼と同じように、自分の存在をすっかり忘れられたユグドラシルがおろおろと二人の様子を見つめていた。

グランはそれを好機ととらえた。

「ゆ、ユグドラシル—— もう戻ってもいいよ——」

センの意識をユグドラシルに誘導させよう。そうすればきつと離れてくれるはずだ。

そう考えたグランの目論み通り、センはグランからパツと離れて「ゆぐゆぐさ——」と大きく手を振った。意識が自分から逸れて安堵するグラン。そしてようやく自分のことに触れてもらえたユグドラシルは、嬉々とした様子で二人と同じくらいのサイズに身を縮め始めた。グランとセンの前に降り立った彼女は、口角を上げて微笑んだ。

「ユグドラシル、ありがとうな」

「ありがとうございます、ゆぐゆぐさん。それからごめんなさい。怖がらせてしまつて」

「—— (ふるふる) 」

「心配いらない」と言わんばかりにユグドラシルが破顔して首を振る。実際に傷つけるとは思っていなかったにせよ、怖がらせてしまったのも事実。少しばつの悪そうな顔

でユグドラシルの顔を覗き込んでいたセンだったが、問題のない彼女の様子にはっと胸をなでおろした。

「……さて。これで模擬訓練も問題なく終わりました。それじゃ、えつと、その、団長さん」

「うん？ ……あ、そうか。そういや、そうだったな」

こつちに振り向いてもじもじとするセンにグランは思い出す。今回、ユグドラシルの肩に乗ることが出来たら、言うことを三つ、出来る範囲内で聞いてあげると口約束していたのを。まさか本当にそれをやってのけるとは思っていなかったので、全くというか、グラン自身は何も準備をしていない。さてどうしたものかとグランは思案するも、センのことだから他の団員みたいに無茶な要求はしてこないだろうと考えた。

事実それは的中する。お願いを事前に考えていたのか、センは開口一番にこう言ってきた。

「えつと、それじゃ最初のお願ひです。あの……わたしの髪、撫でてもらえませんか？」
ほんの少し恥ずかしそうに、おずおずとセンは頭を下げる。けれどもエルーンの耳はどうにも正直らしく、意思をもつてピコピコとせがむ様に動き続けている。そんな彼女の様子にグランは苦笑した。一体何が出てくるのかと思えば、それは欲のないセンらしい要求だった。いいよ、と一言だけ告げてセンの灰色がかかった銀髪を優しく撫でた。

指間からくすぐるセンの髪はさらさらしていて気持ちよく、まるで絹織物のような肌心地を感じさせる。野生児然とした彼女の行動とは裏腹に、きめ細かに整えられた身だしなみはさすがは女の子といったところか。ふわふわ揺れる髪の毛に連動するかのよう、センの耳が喜びを訴えるかのように細かく動いた。

「……………えへへっ」

にへへ、と気持ちよさそうにセンの顔が綻ぶ。もうそろそろ良いだろうかな。とグラランが撫でていた手をふつと上にあげると、センが名残惜しそうに顔を上げた。

「あっ…………」

そして素早い動きでセンはグラランの手をはしつ、と両手で掴む。

突然の行動に面食らったグラランは少し上ずった声で訊ねる。

「せ、セン?」

「あ、あのっ。えつと……………もう少し、撫でてほしい、です」

頬を朱色に染めながら、もう少しだけ。と懇願する。勿論その要求を否定する権利などグラランにはない。

自分の頭に彼の手を持ってきて再びぽふつと乗せると、グラランから撫でてくれるのを待った。その姿は本当に甘えたがりの猫のようで。けれども滅多に見せることのないセンのささやかなわがままに、グラランは満足のいくまで彼女を撫で続けた。それに応え

てくれたグランに喜びを隠せず、気の緩んだセンがぼろりと本音を吐き出した。

「……えへへ。団長さん、好きです」

その言葉を耳にして、撫で続けていた彼の手がピタリと止まった。唐突なる告白にグランの思考が止まったということは間違いない。突然手が止まったことに疑問を感じたセンは「？」と首を傾げるも、自分が今何を言ったのか頭の中で吟味した瞬間——ぼふつ、と顔を真っ赤に染め上げた。まるで長時間火にあたったような薬缶のような顔色で、あたふたと弁明しながら言葉を続ける。

「あつ——ちつ、ちがつ！　ご、ごめんなさいっ！　好きっていうのは、その、撫でられるのが好きってことで……あの、その……えつとつ……ううう……！」

しかしどうにも混乱して言葉が思うようには出てこなく。ぶしゆううと頭から音を上げてセンは顔を覆った。ピコピコ動いていた耳はぶんぶんと激しく動き、それが彼女の感情の一端であるかのように物語っている。自爆してどうにもこうにもいかなくなったセンにグラン自身もどんな言葉をかけてあげたらよいかで困っていたら——

「——？」

キラキラとした目でユグドラシルがこちらを見つめていたことに気付いた。

いうなれば先程から二人の様子をじつと眺めていたのだが、センが気持ちよさそうに頬を緩ませていたのに興味を持ったのか、彼女と同じようにペこりと頭を下げた。セン、と肩をつついてグランがユグドラシルの方を見るように伝える。「あうう……」と涙目で顔を上げたセンはユグドラシルの方に視線を向けると

「……あ。だ、団長さんっ。ゆぐゆぐさんも、同じようにして貰いたみたいですよっ」

その行動の真意を察してか、声を弾ませて——もとい焦りで半音高めになった声色で言ってきた。

右手はセンを撫でつつ、空いた片方の手はユグドラシルの頭に。ぽふ、つと乗った掌の感触にユグドラシルは「??」と理解できない様子でいたが、ふわふわと優しく撫でる掌の心地よさを感じて——

「——」
真顔だった表情を一転。ふにやつ、と頬を緩ませた。きつとそれは感じたことのない気持ちよさだったのだろう。現にさつきまで涙目で沈んでいたセンもいつの間にかやら回復して、猫のように口元を丸めてうつとりと撫でられ続けていた。

「ふこや〜♪」

「——」
♡

「……やれやれ。僕、いつまで撫でたらいいんだろ……」

そんな団長の気苦勞も知ることなく。

無邪気な猫娘と純朴な星晶獸は、ルーマシーのとある一島にて「最初のお願ひ」を満喫するのであつた――。

ちなみに余談だが。

この經驗を機に、グランサイファーに戻つたユグドラシルが色んな人にお辭儀をして回る珍行動があつたとかなかつたとか。真相を知つた団員たちにこれでもかど撫でられまくつたユグドラシルは、それはそれは幸せそうな表情だつたとか――それもまた、別の話。

逃走と日向ぼっこ

◇

その日は遠くまで透き通った青が広がる空模様だった。団員たちもその空を見て、追々と甲板に自分の洗濯物をかけては青空の下で平穏な日々を過ごしている。かくいうグランたちも例には漏れず、陽の当たる暖かな場所で日向ぼっこを満喫していた。

時折こうやってセンと一緒にのどかな時間の流れを楽しんでいたのだが、数日前の模擬訓練を経て改めて彼女が「天気の良い日は一緒に寝ましょう！」とお願いされて今に至る。

今回は割と本格的に熟睡しようと考えているのか、薄生地布団を抱えてドヤ顔のセン、その隣には彼女と同じ真似をしているのか、ポンポンのついた寝帽子を頭に備えたユグドラシルが楽し気な表情で枕を抱きしめていた。

「今日も絶好のお昼寝日和ですね〜！」

「—————♪ (こくこく)」

幸せそうに破顔する二人。訓練とはいえ、少し前まで牙を向けあっていた間柄とは思

えないその様子にグランもつられて笑い出しそうになった。

帝国の脅威を退け、裂帛と劈く怒号が飛び交っていた戦場から辛くも脱した今。周囲には魔物の気配もなく、喉元に切っ先を向けられるような殺気も微塵と感じない。流れる世界は平穩そのものだった。

「出来ればルリアたちも連れてきたかったんだけどね」

「ルリアちゃん、ビイクンジータさんと一緒にお買い物に行っちゃいましたものね。残念です」

まあ、帰ってきたら帰ってきたで文句も言わず、むしろ毛布にコソコソと潜り込んでくるだろう。

ルリアはルリアで意外としたたかな行動に移ることが多いので問題はない。むしろ問題があるのはジータの方か。

最近グランを見る目がやたらと物騒になってきた気がする。たとえるならそう、罪を犯した咎人を見るような蔑んだ目だ。侮蔑に近い視線の理由を問うても「……別に、なんでもないもん」とそっけなく答えるだけで曖昧に濁される始末。

それにジータだけではない。仲が良かった団員たちからも妙なちよつかいをかけられることが多くなっている。グラン自身はそれを団内のスキンシップなんだろうと認識しているが、ジータのそれだけは理由がない分質が悪い。

団を纏める者たちとして示しがつかない行動や態度はご法度だ。もし自分に落ち度があるなら謝罪するし、そうでないなら理由を聞かせてほしいし——などと無言でむつりとした顔で黙り込んでいたら

「にや〜」

「わぷつ?!? ちょよ、ちょつとセン?!?」

唐突にセンが毛布をグランにかけてきた。もふもふとした肌触りのそれはセンのお気に入りらしく、最近をよくそれを甲板に持ち込んでいる。顔に触れる綿生地は尖りつつあった思考を丸め、穏やかな気持ちにさせる。

「むう、グランさん。今なんだか、難しそうな顔してました」

「いや、そんな顔してな——してたかも」

「してました。駄目です、楽しい時は笑わないと損ですよ。そうじゃないと、グランさんだけじゃない、ほかの人にまでしかめっ面がうつちやいますよ」

そうセンに諫められて、グランは肩を小さくすくめる。

そうだ。こんな時まで自分はいったい何を考えていたのだろうか。きつとジータのそれもちやんとした理由があるのだろうか、これ以上意味のない険悪な空気が続いたって仕方ないだけだ。

重苦しい空気にならないよう、それとなくジータが帰ってきたら話を切り出してみよ

う——とセンとユグドラシルに促されながらいそいそと布団に入り、甲板に寝転がろうとして

「あれ、団長じゃん。それにセンとユグドラシルも。どしたのよ、こんなところで布団なんか被って」

ふわふわと空を散歩(?)中のメーテラと出会った。

「あ、メーテラ。いい天気だね」

「メーテラさん、こんにちは。今団長さんたちと一緒に日向ぼっこしてるんです」

「はいはい。いい天気だしこんにちは。まったくおこちゃまはいい気なもんね。こういう晴れた日こそいい男探しに精を出すアタシを見習ってほしいわー。今どき日向ぼっこなんて——ん? 待って、日向ぼっこ……?」

そう嘯き、メーテラがじろじろと三人を眺め思案顔で俯く。その奇妙な行動に三人そろって首を傾げた。

そして何やら釈然としない様子でセンの近くに寄ると、こう耳打ちしてきた。

「ねえセン、あんたこないだ『団長やユグドラシルと寝てる』って言ってたよね? それってまさか……」

「あ、はい。そうですよ。日向ぼっこです。今日も良い天気なので、良かったらメーテラさんも一緒にどうですか?」

嘘偽りのないセンの言葉を聞いて「やはりか」といった顔でメーテラの表情が一気に淡くなるのが見えた。

そのまま盛大なため息を吐き、センに助言する。

「……はあ。ねえセン、あんたあんまり公共の場で『誰かと寝てる』って言わない方がいいわよ」

「え？　ど、どうしてですか？」

「意味が違うのよ意味が。日向ぼっこ、なら大丈夫だけど頻繁に寝てるってのは——ああもう！　めんどくさい！　つまりはね——」こによこによこによこによこによこ……」

そうセンの大きなエルーン耳にひそひそと言葉をかける。それに最初は「ふむふむ」と相槌を打っていたセンだったが、後半になるにつれてビクツ！　と身体が強張り始め、耳打ちしていたその個所は次第に赤く染まっていった——彼女自身もわなわなと震え始めていた。

挙動不審な様子は見て取れる。一体メーテラはセンに何を語りかけているんだろう。どうせろくでもないことだろうけど、と不審な眼で二人を眺めていたグランだったが

「——というわけで。今グランサイファーはあらぬ誤解が広まっている。という事実だけ伝えておくわ。それじゃ。アタシはこれからいい男探しのために空を旅するから。」

グランさああああああん！ わたっわたし！ わたし、とんでもないこと言っちゃいましたああああああああっ！！」

がばっ！ と毛布に潜っていたセンが、あろうことかそれを跳ね除けて立ち上がり、ありつたけの謝罪をグランにぶつけると——そのままぐるりと背を向けて踵を返してしまふ。

「あ、ちよ、ちよつと!? セン!?」

「ごめんなさああああああいっつ!!」

それに慌ててグランが静止するも、もはや彼女の耳には届かず。疾風怒濤の勢いでセンは猫のように逃げ去ってしまった。ちなみに毛布を跳ね除けられてもユグドラシルはすやすやと幸せそうに寝入っている。

唐突な事態にも我関せず、彼女はマイペースそのものだ。

突発的なセンの行動に理解の追いつかないグランは、まるで時が止まった世界のように、走り去っていくセンの背中を眺めることしか出来なかった。

いつものように流れていた日常が、少しずつ変わり始めていく。

締めつけられて、苦しみながら

センの広めてしまった誤解から早一週間が過ぎようとしていた。はじめは唆されたり囁し立てたりする団員たちの言葉を怪訝な表情で聞いていたグランだったが、事の理由を知るや否、血相を変えてあちこちに走り回っていた。

「一緒に寝ているというのは意味が違う」。その言葉に半信半疑な視線を見つめる団員もいれば、素直に信じて胸をなでおろす団員もいる。各々が様々な反応を返しつつも浸透してしまった誤解を正しながら――グランは今もお、彼と顔を合わせようとしないうセンの行方を追っていた。

しかし。逃げ回るセンの姿を見た者はおらず、一向に見つかからない彼女の姿にグランは困り果てていた。メーテラに指摘されてから事の重大さに気づいた彼女だったが、まさかあんな反応をするとは思わなかったらしく、グラン自身も感情の整理がつかないまままでセンを探していた。

彼女の行きそうなところを風漬しに見て回っても、そこに居るのは事情を知らない別の団員たちで、訪ねてもここにはいないと返される。本当にどこに行っただろう、と

心配になりつつも、同時に内なる感情のモヤが無意識に生まれ始めてきて、グランもいつしか焦りを覚えていた。

「セン、どこ行っちゃったんだろう」

最初のうちはなんとか見つけて声をかけていたのに、自分の顔を見るたびにセンは顔を真っ赤にして「ごめんなさい！」とだけ謝って逃げ去っていく。

それを何度か繰り返しているうちに、とうとうセンは全く姿を見せなくなっていた。おそらくどこかで隠れているんだろうとは思うけど、そんな彼女の行動が——少しだけ、グランは面白くなかった。

恥ずかしいのは分かる。誤解とはいえ、自分の行いが周囲にあらぬ事実として広まってしまったこともあり、今は後悔と羞恥でいっぱい気持ちなんだろう。

けれども。ここまで言葉を交わされずに逃げ回られていると、何だか避けられているような気分になって、悔しい反面、寂しい気持ちも少しずつ生まれ始めていた。

ついこないだまでにこやかに笑って、自分の傍にいたはずの彼女が。

今では悲しそうな顔をして自分から去っていかうとする。どうしようもない事態だったとはいえ、そんな彼女の姿は見たくなかった。あるはずがないのに、嫌われているような錯覚も抱き始めて……ざわざわと穏やかではない心情と共に、自分の胸へ棘のような痛みだけが刺さっていく。

何なんだろう、この気持ちは。

自分の傍にあつた笑顔が、温もりが感じられなくなつて。

ひどく落ち着かない気分になつてしまふ。首元を撫でれば気持ちよさそうにごろごろと猫の真似をするセンの姿がこれから見られなくなるんじゃないのかと、前のような関係に戻られなくなるんじゃないのかと——とてつもない不安に駆られていく。

そうして意気消沈し始めたグランが肩を落としながらも向かつた先は、ダーントの部屋だつた。

猫つながりでもしくは、と思つたのだが、おそらくここも居ないだろう。

そう考えつつも、グランは部屋のドアをノックする。数回扉を叩いてから、中からダーントの声が聞こえてきた。それを耳にしてグランは失礼します、とだけ言つて中に入る。ちようど彼はリベラたちの餌付けをしていた最中らしく、グランの姿を見るやりべラたちは寄り添うように彼にしがみついてきた。それらを抱きかかえながら、グランはダーントへ訊ねる。

「わつとと……ダーント。失礼するよ。……センは、ここに來てない？」

「セン殿？ いや……彼女は見ていないが。如何様した？」

あつという間に猫まみれになつたグランにダーントは懽然な顔をする。その訳を簡潔に語ると、なるほどと彼は頷いた。

「しかし……その様子では探しているだけとは思えないが。団長、探しているものはセン殿だけか？ どうも汝には、心ここに有らずといった様子が見受けられるが」

鋭い指摘を受けて、凶星を突かれたグランが口角をぐつと下げて押し黙る。居心地悪そうに自分の手を猫の頭に乗せて撫でてはいるが、その動作が不自然なのは誰が見ても分かる。それに気付かないのは撫でられてゴロゴロと喉を鳴らす猫たちだけで、目の前の人物には自分の内面をしつかりと見透かしていたようだ。

やがて観念したグランはダーントからそつと視線を外すと、独り言をつぶやくように自らの思いを吐露していった。

「……最近さ。少し、おかしいんだ。こうやってセンを探しているのはいつものことなのに、それが今では凄く不安で仕方ないんだ。いつも僕とセンは一緒に居てさ、何をする時も一緒だった」

「確かに。汝とセン殿はいつも一緒に居たな。仲睦まじく寝ているところも良く見受けられた」

「うん。それが習慣になっちゃつてるのかもしれないんだけど……改めて、センに距離を置かれるようになってから、急に一人が寂しくなったんだ。おかしいよね、同じ騎空艇に乗っているはずなのに、ちよつと離れただけでこんなに寂しい気持ちになるなんてさ……今までこんなことなかったのに」

きつかけはどこにでもある、ただの勘違い。

けれども、その勘違いから派生したすれ違いはいつしか孤独を生み。

孤独は傍にいたという事実を、傍にあった温もりを思い出して焦燥を生み出していく。

彼女に拒絶をされているわけでもない。嫌われたわけでもない。

それは彼自身も理解しているはずなのに——自分の内面が、隠れていた感情がやけに納得してくれなくて、ふつつつと行く当てもなく燻っていた。

「なるほどな……」

迷いのある言葉を聞き、ダーントはふむと思考を逡巡させる。傷心する彼の姿はいつも澆刺としていた団長とは到底思えない。

そうだ。どれだけ強かろうと、この目先にいる人物はまだ大人になり切れない子供であり、未だ精神は発達の最中だ。ある意味では未だに純粹というべきだが——それもいずれ時が過ぎれば終わりを迎え、非情にも唐突に訪れては心の安寧を乱しては歪みを生んでいく。

けれどもそれはすべてが間違っているわけではなく、子供の心が大人へと変貌していく過程を描いているにすぎない。故にダーントは少しだけ迷いを生んだ。ごくありふ

れた感情の発生であるが為に、無碍に上つ面の言葉で諭すことも失礼なのでは、と思つたからだ。

そしてダーントはしばらくの沈黙の後、こうグランに語る。

片手に読み耽つていた「ねこのきもち」という書物をパタンと閉じながら、懽然とした態度で言い放つた。

「……団長。迷い、困難に遭遇した時にこそ、自由なる精神のままに行動すればいい。複雑に絡み合つた思考に従つたところで、紐解けぬ荒縄のように心が強く締め付けられる。汝が抱く思いとは何か、それを偽らず素直に表現したまま、ひたすらに突き進むがいい。これまでがそうだったように、我が道を晴天のような明るさで示した団長であれば——自ずと汝の胸中の真理に近づくだらう」

「僕が抱く……思い？」

「ああ。大切なのは自分が抱くその心模様だ。理論的に整理したところで、繕つただけの中身なき語りはいずれ『騙り』へと変貌する。己が感情を、そして心を裏切りさえしなければいい。……含蓄のごとく語つたが、今はその感情を優先してみてはどうだろうか。団長は今、目指すべき場所へ確かに歩みを進ませている。その気持ちが誠のものならば、セン殿にも伝わるだらう」

きつと、団長自身もその気持ちに気付いていない。長く傍にいた分だけ、近くに

ことが当たり前であると錯覚してしまつたから。

急に訪れてしまつた関係の乖離に身体と思考が追い付いていけずにやきもきしているだけなのだろう。それも当然のことだ。執務中でも休憩中でも、団長を気遣いながらも優しい笑みを浮かべて傍に寄りそうセンの姿があつたから。喪失感も比類して大きくなり、孤独が彼の胸の内を蝕んでいつたんだらう。

きつと彼の中で、その感情は団員という一括りの関係で終わらせられない物に変化していて。

だからこそ躍起になつてセンの姿を追い求めてしまう。失つたかたわらの幸せを取り戻さんかのために半ば自棄になりつつも、素直に動き続けようとする心の在り方は否定するには惜しいものを感じさせていた。だからこそダーントはその想いを真摯に受け止め、グランを鼓舞した。団長は賢い。ただ経験が浅いだけで、己の心の変貌がもどかしくてたまらないだけだ。故に、その感情の赴くままに突き進めばいずればその感情の正体に辿り着くだろうと——定かではないそんな思いをダーントは感じていた。

その思いが通じたのか、グランは彼に言われた言葉をゆつくり頭の中で噛みしめながら——うん、と呟いた。泳いでいた瞳も真つ直ぐ決意を示したそれに変わり、安寧に辿り着いたとは言えずとも多少なりの落ち着きを見せ始めている。良い瞳の色だ、とダーントは黙して語つた。かつて自分がこの団に加入した時に見せたものと変わらないそ

れには、曲がることのない信念と諦めを知らない若さゆえの情熱がしかと現れている。

「……そっか。ありがとう、ダーント。話せて、少し気分がすっきりしたよ」

「なに、礼を言われるまでもない。自由なる精神を得るためなら、我はいつでも汝に助力を尽くそう。

……みうちちゃん殿も、団長の行く先を期待しておられるようだ」

そう言われて、ふっと視線を猫たちに向ける。そこにはグランによじ登っていた——みうちちゃんと呼ばれた子猫が、ガラス細工のようなキラキラとした眼で彼をじつと見つめていた。穢れを知らない澄み切った視線が一体グランにどんな期待をしているのかはわからないが、それでも機敏に人間の感情を察してか「みやあ」と甘えるように鳴いてグランに頬を摺り寄せた。そんな愛くるしい様子がセンの姿と重なって、少しだけ胸にちくりとした痛みが走ったけれど、この暖かさを自分は求めているんだということを改めて強く実感する。

「それじゃ、またセンを探してみることにするよ」とだけ伝えてグランは部屋を後にした。グランの姿がなくなつて少しつまらなさそうに居心地を悪くする猫たちだったが、そんな中でダーントは——

「——若者たちの蒼き旅路に、脅かされぬ自由と祝福を」

彼なりの答えを見つけることを切に願いながら、そう一人呟くのであった。



「うとうとう……わたし、どんな顔して団長さんと喋ればいいんでしょう……」

時は流れて夕刻。晴れ晴れと広がっていた空はいつしか小麦色の色彩を見せ始め、夕餉の時間に差し掛かっている。快晴だったということもあり太陽を隠す曇天は見られないものの、甲板で見つめるセンの心は暗く淀んでしよげかえっていた。

穏やかな一日だったというのに、自分の失言のせいで内面は一向に晴れやしない。気づかなかった事実には肩を落として溜息を一つ、センは空を仰ぎながら「にや……と悲哀に満ちた声を上げた。

あれからグランの顔をまともに見られるはずがなく、彼から声をかけられても真つ赤

な顔で謝罪を述べて逃げ回っていた。

その度に嫌でも見えるグランの悲しそうな表情にセンの胸がズキリと痛んだが、それでも現状、グランとどうやって喋ったらいいか、どういう話題にすればいいのか彼女には分からなくて。

申し訳ない気持ちのまま逃げ回り、自分の気持ちが落ち着くまで一人で静かにしているつもりだった。

けれども。メーテラに耳打ちされた内容が内容だけに、それを想起する度に全身が燃え上がるように熱くなって、平静に保とうとしていた理性がアンバランスに傾き始める。

こんなに乱れたのは初めてだった。こんなにも心がかき乱されたことは今までの人生で一度もなかった。

そしてふっと気づく。これまでの自分の行いを。過去にやらかしたセンの行動を。

「……もしかしてわたし、今まで団長さんにかなり大胆なこととしてたんじゃ……」

たとえばそう。ついこの間は冬の訪れを到来させるかのような冷気が駆け巡る、寒い一日だった。

その日のセンは凍るような冷たさに身震いして、枕を片手にグランの部屋に忍び込

み、彼で暖を取りながら眠りに耽った。その時は別段何も起こることなく、彼が起きる前に目を覚ましたセンは何喰わぬ顔で自室に戻って平然を装っていたのだが——これもよくよく考えれば年頃の男女がしている行動の範疇を超えている。

その他にも平然と抱き着いたり、膝枕をしてもらったり、喉元をくすぐってもらったり、頭を撫でてもらったり、彼の頬に自分の頬を擦りつけたり——等々。

その事実を一つ一つ思い出していくたび、彼女は叫びだしたくなる衝動に駆られた。これでは、まるで——

「こ、これではわたし、まるで団長さんのこ、恋人みたいじゃないですか……！」

頭を押さえてあわわわと口を震わせる。焦点の定まらない瞳は沈んでいく太陽ではなく漆黒に彩られる闇夜に向かう。底知れない黒色が広がるその情景を眺めて更にパニックになりかけ、危うく昇天の勢いに達しかねないほどの理性の蒸発をセンは感じた。

傍から見れば、それは確かに付き合っているもおかしくはないスキンシップだったと

思う。

くわえて今回の騒動だ。まるで拳銃の引き金を引くかのように、前から募らせていた団員たちの疑惑は確信に変わっただろう。

自覚のない行動だったと猛省する。団長の優しさに甘えてしまいが故に、他人から見ても軽率な行動だったと思う。

これからは身を引き締めて、ほかの人に誤解されないような振る舞いをしなくちゃ、と無理やり前向きな思考に戻そうと躍起になるセンだったが――

「……………あれ?」

そんな折、彼女は見つけてしまった。グランサイファーの廊下と甲板部を繋ぐ階段から覗く姿を。聞き覚えのある声たちは少しだけ弾んでいて、けれども内容自体は至って真面目一貫としている。

誰だろうと考える間もなくセンは気づいた。

それは何やら神妙な顔で議論を交わす団長と副団長——グランとジータだった。

「わ、わわっ！」

何やら熱心にしゃべりこんでいる故、幸いなことに二人ともまだ彼女には気づいていない。

突然の来訪に慌てながら、センは近くにあった木樽に身を隠した。ガタゴトと音はしていたものの、特に不審に思われることはなく。蓋の部分を少しだけ開けて、センはうつすらと覗き込む。

「わ、わたし、どうして隠れてしまったんでしょう……」

自分でも思いもしなかった行動に面食らいつつ、センは静かに息を殺してその光景に眼を向けるのであった。



蓋をそつと開けて二人の様子を見るセン。別に隠れる必要などなかったのだが、今回の一件がまだ尾ひれをつけて回っていると少し面倒くさい事態になるかもしれない。

ここで三者気まずい雰囲気になるのもよくないだろう、とセンは自分に納得させながら彼らの話には耳をそばだてた。

内容自体は別に普段と何ら変わらない雑談と、これからのことについてだった。浮いた浮かないなどの話題ではなく、今後の方針や団内の決め事を確認しあう事務的な会話であり、特に面白みを感じられるようなものではなかった。

——それなのに。その様子を陰で眺めていたセンは、何故だか落ち着かない素振り二人を見つめていた。

ジータと交わすグランの喋り方が、グランと話すジータの言葉の抑揚が。まるで自分と接するそれと全く違うように思えて。

彼の笑顔は何度も見たはずだったのに、幼馴染であるジータの前で見せるグランの表情は、本当の彼の姿を現しているようにも見えて――

「…………あれ？」

唐突に心が、ズキリと痛んだ。

どうして胸が痛くなったのか、センは分からなかった。

分からないけれど、なぜだか悲しい。苦しい。そんな気持ちに襲い掛かってくる。

無性に切なくて、辛くて。またしても襲い来る理解の出来ない感情が、センを混乱に導いていく。

どうして、わたしはグランさんとジータさんが楽しそうに喋っているのが気に入らないんだろう。

どうして、二人の様子を眺めているのが、こんなにもつらいんだろう。

わたし——こんな嫌な人、だったのかな。

団長さんたちはただ、仲良く喋ってるだけなのに。

巡り巡っていく感情に到達する場所などなく、ただ延々と虚空を彷徨うだけ。

ふいに見せた彼の横顔が自分の鼓動を高鳴らせ、そしてその顔が自分に向いていないことをセンは知る。

ふわふわと揺れる想いは固まらずに液体のまま、そうして一筋の雫となって流れていく。自分が泣いていることに気付いて、センは驚いた。

無意識の内に瞳からこぼれた涙が服の上に落ちていくのを見て、慌てて目尻を指で拭き、ぶんぶん頭を振る。

きつと自分は今、情緒が不安定なだけ。一時の感情に左右されているだけなんだ。

——そう言い聞かせたかったけれど。

楽し気に笑う二人の顔を見て、お似合いの二人だなんて少しでも思ってしまったから。

何故だか余計に泣きたくなって仕方なかった。

やがてセンは樽の蓋を閉め、彼らの様子を見るのを止めた。

光の差し込まない木樽の中、声を殺してセンは身を屈めて小さく蹲った。

狭いところを好む猫のように、暗闇の中で誰にも知られることなく——感情を押し殺しながら嗚咽を漏らした。

少しずつ、けれども確実に。心を変容していく。

そうして見つけた笑顔の答え



遠く、遠く。彼方に映える空の色鮮やかな情景は、薄く目を細めないと見えないくらいに夜の暗がりへと滲んでいく。地平線に埋もれていく茜空が流れる時をやけに短く感じさせて、今日という日が終わっていくという事実が心へじんわりと染み渡っていった。

そんな物悲しい気持ちを胸に抱きながら、グランは遠くを見据えながら「はあ」と息を吐き出す。

その様子を見てか、隣で会話を楽しんでいたジータが怪訝そうにこう尋ねてきた。

「どうしたの、そんな黄昏ちやつてさ」

「ああ、いや。別に……ちよつと、寒くなってきたかな。つて」

誤魔化すように気温の変化を理由にしてみたが、それが上っ面の返事だということを幼馴染はしっかり見抜いていたらしく。

変に勿体ぶらず、ジータはグランが心残りになっている事実を突きつけてきた。

「……センちゃんのこと？」

その名を耳にして、グランは「うっ」とうめくように声を詰まらせる。明らかに挙動が変化したその様子を見てジータは「凶星か」とほんの少しだけ口角をあげ、彼の肩をぽんぽんと優しくたたいた。

「もう、そんな顔しなくてもいいじゃん。誤解だつてこと、みんなは分かっているからさ。分かかって面白がっているだけだよ。ほら、元氣出しなつて」

そうは言っても、グランは未だ憂いを断てない顔で空を眺めている。そんな顔をまじまじと見つめるジータには彼の顔がどう映っていたのだろうか。団長職に就いて的確に指示をする彼とはまた違う、幼い頃から見てきたもう一つの姿ではあるが——それにしては今まで見せたことのない表情だ。

自分が見たことのない顔を見せているグランにジータは一瞬だけ戸惑いを見せた。もしかして事態はもっと深刻なのかも、と悪い方向に思考が転換し始めるが、ぼつりぼつりと語り始めた彼の言葉を聞いて、その思考は雲散していった。

センと離れてから思ったこと。ダントに言われたこと。今自分が抱えている漠然とした感情。燻っていた思いすべてを、ありのままの言葉でグランは独り言のように

綴っていった。それらを一言一句聞き逃さず耳にしていたジータは「……なるほどね」と納得のいった様子で言葉を放った。

やがてジータは彼の言葉を遮るように人差し指をグランの口元に添えると、流れる手つきでその頬に手をあてた。優しい指の感触は柔らかく、ジータの体温でほんのりと温かい。けれど唐突に頬に手を当てられたグランは戸惑い気味に「じ、ジータ……？」と疑問を露にした。そんな彼を見つめながら、ジータは優しい微笑みを浮かべながらこう言う。

「うん。ダーントさんの言う通り、グランはそのままセンちゃんを追いかけた方がいいよ。そのほうが二人のためになると思うしき」

「二人……って、僕と、センのこと？」

呆けた顔でグランは訊ねる。しかしジータはその問いには返事をせず、まるで独り言のように言葉を続けていった。当てていた手のひらを彼の頬からそっと離せば、冷たい風がその温もりを奪うかのように吹き付けてくる。ジータは彼からふいつと視線を逸

らし、うーんと伸びをしながら空を仰いだ。

すでに空は暗く、星たちが活発に瞬きを見せようとしていた。

「センちゃんは幸せ者だなあ。こんなに想ってもらえる人がいるなんてさ」

それは本当に羨ましそうに、けれどどこか楽しそうな。

姉弟、或いは兄妹のように育ってきたグランの新たな一面を見られたことへの喜びと——ほんの少しの寂しさを含ませた言葉だった。そしてジータは人当たりのいいふわりとした笑顔を見せながら、決定的なステップを踏み出そうとしている彼の背中を後押しするように言う。人によつては意地悪にも聞こえる、そんな質問をグランに問いかけながら。

「ねえ、グラン。……グランは、さ。私のこと、好き？」

「好きって……そんなの、好きに決まってるだろ。そんなの今更、聞くことでもないし、そうじゃないとこうやって一緒に旅してないよ」

「じゃあ、センちゃんは？」

「センのことだって、もちろん——」

そう言いかけて。グランはふっとセンの顔を思い出し——はっ、と気づいた。

初めて出会った時はまるで活発な猫そのものだと思いながら、空を見てみたいと願う彼女の想いに応えるよう団に迎えた。

内気ながらも色んな人と交流をして徐々に団にも馴染んでいき、真面目だけれど自由奔放な性格にダーントと馬が合い、まるで年の離れた友達のように触れ合っていたのを微笑ましく眺めていたあの頃。

団長室のドアからおおずおおずと顔を覗かせてこつちを物欲しそうに見つめてくる彼女を手招いて一緒に遊んだり、一緒に寝たり、一緒に戦ったり——そうしたこれまでの大切な思い出が、まるで走馬灯のようにグランの頭の中を駆け巡っていく。

猫の真似をするようお願いされても、困ったように照れながらやってくれるセンの

姿に愛らしく思った時であれば、力強く颯爽と駆け抜けていく彼女の度胸と器量のよさに感心した時もあった。

自分の関心をひこうとわざと猫っぽく振舞って甘えてくることもあったし、優しく撫でてあげれば耳をぴんと立てて寄り添い、そのまま離れようとしないうちにもあった。そんな行動がグランの支えにもなっていて、日々張りつめていた心を癒してくれていた。

無垢に優しく笑うその顔が。

彼女から発せられる言葉の一つ一つが。

センと共に過ごしていた、あの幸せに満ちた陽だまりが。

たまらなく懐かしく感じて、どうしようもなく欲している。

……そうか。そう、だったんだ。

こんなにも追いかけていたのは。

こんなにも我を忘れるくらい彼女を求めていたのは。

「……へへっ。ようやく気付いたみたいだね。この鈍感」

「そっか、うん……そう、だな。僕はこんなにも——」

——センのことが、好きだったんだ。

それは団員としてではなく、ジータに向けられる親愛でもなく。

一人の女の子として、異性として——初めてグランが自覚した瞬間だった。

物憂げに揺らいでいた仄暗い感情が音なく静かに溶けていき、代わりに優しさに包まれた陽だまりのような想いがとくとくと心の中に満ちていった。どこか遠目で自分の感情を客観視していたグランは、回り道をしながらもその感情の終着点に辿り着いたのだ。

彼女が愛しいというこの気持ちは、誰かに言われたわけでもなくグランが生み出した大切な感情で。

ひたむきなほど真っ直ぐ、純真な気持ちは胸の奥で輝きを見せ始めている。これが恋なんだ。誰かを本気で好きになることなんだと——ようやくグランは気づくことがで

きた。

そんな彼は気恥ずかしそうにふいっとジータから視線を外すと、控えめに拳を彼女に差し出す。それが何を意味しているのか直ぐに気付いた彼女は——へへへ、と無邪気に笑って、彼と同じように拳を差し出して——コツン、と重ねた。

「——ありがとう、ジータ」

「——どういたしまして、相棒」

その言葉を耳にして、グランは自分の気持ちにけじめがつけたんだとジータは悟る。それは嬉しくもあり寂しくもあるけれど——それは彼が望んで選んだ道であり、彼が望んで選んだ人だから。だからこそ、その想いを大切にしてほしい。有耶無耶にしてほしくない。そんなおせっかいかいともいえる感情が横行したにすぎないが、幸せそうに笑うグランの横顔が眩しくて、これで良かったんだと納得する。

「それじゃ、早速センを探してくるよ」とだけ言って駆け足でグランは踵を返した。そ

んな彼の背中を眺めながら、ジータは二人のこれからを祈る様に——そして報われるように、その背に言葉を投げかけたのだった。

「逃げてたのは、きつとセンちゃんだけじゃないよ。だから、今度はしつかり捕まえてあげてね。彼女と……自分の想いを」



「……んっ」

光の差し込まない木樽の中、センは微睡みの中にあつた意識を少しずつ覚醒させていく。うっすらと眼を開けてもそこには瞳を閉じていた景色と同じ暗闇が広がっていて、いつの間にか自分はこの中で寝ていたのだと気づく。

目元にはくつきりと涙の跡が残っていて、少しだけかさついた頬に悲哀の名残が留まっている。木樽の蓋を開けて軽快な動作で飛び出ると、外は既に日没を迎えていた。日中にあつた和やかな空気はとうの昔に消え失せ、生物の息吹を感じさせない寂寥な情景に変わっている。少しだけ肌寒くなった夜間の気温にセンは身震いを一つすると、同じ体勢で居続けて鈍った身体を慣らすために伸びをし、大爪を外して掌を解放させた。

空高くには満月が映えていて、さして暗いという印象はない。むしろ月光が太陽の代わりといわんばかりに輝いていて、傷心気味な彼女の心を癒すよう、陽炎のように小さく揺らめいていた。

「月が……綺麗ですね」

空を見上げ、誰に当てるわけでもなくそう言う。何処かの世界では、この言葉が遠回しの告白になっているなんてセンは知りもしない。知らないけれど、その言葉の意味を裏付けるかのように彼女の心境は切なさや物寂しさに浸っており、甘えたい、縋りたい、そんな心の拠り所を求めて浮かび上がってくるのは——いつも団長の、グランの姿だった。

「……グラン、さん」

抑揚なく、彼の名を呟く。自分が何をしても笑顔で接してくれて、でも危険な行いをするれば本気で怒ってくれて、本当に自分を、仲間として大切に扱ってくれた。育ってきた村の人たちとは違う、年下だけでも面倒見のよいお兄さんのような姿に自然と甘えていた。初めての、気兼ねなく触れ合えることのできる異性だった。

だからこそ。逃げ回っていて、そのあたたかな居場所から離れたことで気づいた。温かみの感じられない世界はこんなにも寂しくって、切なくって。

自分に語り掛けてくる優しい気な声が、落ち着いた声色が聴けないというだけで。

こんなにも胸を締め付けられるものだとは思ってなかった。

「グラン、さんっ……」

絞りだすような声で、再び彼の名前を呼ぶ。

愛しい。グランのことが、誰よりも愛おしくて仕方ない。

どうしてこんなに彼のことがばかり想ってしまうんだろう。そんな疑問よりも早くに到達する答えが、彼女の中では確固たる物に変わっていた。枯れ果てたはずの瞳から涙が再び溢れそうになる。ジータに嫉妬していた自分に嫌悪して、グランの知らない一面を覗き見ることで気づいた。

わたしは、きつと。グランさんのことが――

「――セン?」

唐突に背後から届いた、聞き覚えのある声。

疑問を孕んだその声は落ち着き払っていて、けれども暗がりにいるのがセンかどうかわからなかったのか、少しだけ不安な声色だった。突然の想い人からの声にセンはびくりと肩を跳ね上げる。慌てて振り返ると、そこには確かに団長――グランの姿がそこにあった。

「グ、グラン、さん……!?!」

「良かった。甲板に居たのか。どこ探しても見つからないからみんな大騒ぎだったんだ

「よ」

そう言って彼はほっと一息をつくとき、センの方に向けて歩み寄ってくる。泣いていたことに気付かれてはまずい。そう思っでぐしぐしと腕で目元をぬぐうと「ご、ごめんなさい」としおらしく謝った。

「でも、甲板もくまなく探したはずだったんだけど、その時はいなかったよね。セン、甲板のどこに居たんだ？」

「あ、え、えっと……実は木樽の中に隠れて……そしたらいつの間にか眠っちゃって……」

「あ……そういうことか。それなら見つからないわけだ。全く、あんまり心配かけさせないでくれよ」

ほんの少しだけ咎める口調で言われて、センはしゅんと小さく肩を落とす。確かに心配をかけてしまったのは事実だし、自分が撒いた種に暴走してみんなを心配かけてしまった。それらすべてが彼女にのしかかってきて、再びセンは罪悪感に苛まれてしまった。垂れ気味な耳を見てグランは反省して凹んでいることに気付いてか、少しだけ強張っていた表情をふっと緩めると、俯いていたセンの頭にぽふ、っと手を当てた。

「……？ グラン、さん……？」

「でも、狭い木樽の中に入ってそのまま寝ちやうなんて。本当にセンは猫みたいだね」

事情を話せば、きつとみんなも怒りはしないだろうし、むしろ猫みたいで可愛いって言ってくれるんじゃないのかな。とグランは大きく笑った。わしわしと力強く頭を撫でてくれているのは、きつと落ち込んでいる自分を慰めてくれていているんだと気づいた。そんな優しさに触れて、つい——ぽつりと本音が漏れた。

「……可愛いだけじゃ、ダメ……です」

「えっ?」

「皆さん、わたしのことを猫さんみたいだから可愛いって言うてくれるんです。通りすがるときに頭を撫でてくれたり、一緒に遊んでくれたり……いつも気にかけてくれて、凄く嬉しいんです」

けど、だけれど。

他の人はそれでもいい。

それでもいいけれど——。

「でも……でも、可愛いだけじゃ、ダメなんです。」

あなたには——グランさんには可愛いだけで、終わってほしくないんです」

そうセンから告げられ、グランの顔に当惑が走った。急にどうしたんだろう。本来ならここで顔を赤く染めて照れるはずなのに。予想外のセンの反応に戸惑いを隠せないグランだったが、それにさしたる気にも留めず、センは自分の心の中で燻っていた感情

たちを少しずつ吐き出していった。

「……食堂でわたしに誤解を招く発言をしてから、ちよつとの時間が過ぎましたね。メーテラさんに指摘されて、それに気づいた時には恥ずかしくって……こうやって逃げ続けていました。グランさんの顔を見ちゃうと、顔が真っ赤になって、何も話せなくなっちゃって」

「ま、まあそれは……確かに分かると言えば、分かるんだけど。でも、僕はそんなこと気にしてないよ。僕だつて言われてから気づいたんだ。だからセンもそんなに気にする必要は——」

「いいえ。そうじゃないんです。誤解を生んで、恥ずかしさのあまりに木樽の中に隠れて、そして——見ちゃったんです。グランさんと、ジータさんがお話してるところを。それは別に何のおかしくもないことのはずなのに——楽しそうにしゃべっているお二人を見て、わたし——ジータさんに嫉妬、しちやっただんです」

それは、自分の感情を認めるにはあまりにも真っ直ぐな答えで。

誰かと仲睦まじそうに話しているだけで嫉妬してしまうくらい、センは意識せずともグランのことを想っていた。その事実を鑑みるたび、振り返るたびに想いが強くなつて、ほのかな慕情がより一層大きくなる。

「——最初は、怖かったです。村の人たちに抱いたことのない感情が生まれて、苦しくつ

て、ぎゅうぎゅう胸が締め付けられて。どうすることも出来なくて辛くて、悲しくつて。身体を動かしていればこんな気持ちもなくなるのかな、余計なことを考えないくらい戦闘に、鍛錬に集中していれば、こんな気持ちもなくなるんじゃないのかなって、考えました……」

混乱していたのは、根底に隠れていた「その想い」を押し殺していたから。

無意識的に抱いていた気持ちを蔑ろにしようとしていたから、反抗が生まれて、傷ついた。苦しんだ。

けれど。自分の奥底にある「感情」に素直になつたら、変わっていた。

親愛。信頼。それらで塗り固められたものであると感じ続けていたから、齟齬が生まれした。

ずれていた心の欠片を上手くはめ込むことによつて——ようやく最後のピースが、音を上げてしつかりとはまった。

「でも、でもっ……なくなるどころか、その気持ちはずっと大きくなってっ……グラんさんの、グラんさんの顔を思い出すたびにその想いが、強くなっていました。……わたし、ずっと自分に、嘘をついていました。素直であろうと思つてたのに、意気地なしただけでした。

逃げ回っていて、そして一人になって気づいたんです。

あなたのそばにいることの心地よさを。あなたと共にいられることの幸せな気持ちを。

……ごめんなさい、こんなこと、突然言つて、本当にごめんなさい。わたしは、わたし、は……っ」

静かにセンの言葉に耳を傾けるグランの顔は真摯なそれに変わつていて。

茶化そうとしていないその表情が、センの気持ちを本気で受け止めようとしているのが見て取れる。

そして、センは伝えた。

不透明で漠然としていたその想いを。

これまで抱いていた感情の集大成を——はつきりと告げた。

「グランさんのこと、好きです。大好きです。グランさんがそばにいてくれると、あつたかい気持ちになつて、幸せになれるんです。陽だまりのような、お日様のような、優しいあなたが大好きなんです」

それはあまりにも真つ直ぐにグランの胸に届く好意で。

着飾つた言葉で彩ることを知らないセンだからこそ言える、無垢で素直な告白だつ

た。

「……わたし、何の取柄もないですし、お料理もそんなに出来るわけでもないですし、グランさんを振り回してばかりの団員かもしれないませんが、それでも……頑張ります、あなたのお役に立てるように、あなたの背中を支えられるように、努力します。空の世界をろくにしない田舎娘と思われちゃうかもしれないませんが……それでも、あなたのそばにいたいんです。大好きな人の、隣にいたいんです」

心細くなつて、物悲しくなつて。

そんな時は、いつもあなたが傍にいてくれた。

包み込むような微笑みを見せて、優しくなでってくれるグランのことが、センは好きだった。

饒舌に放った言葉たちは一端の区切りをつけ、今度はグランからの言葉を待つている。

その言葉を待つセンは——顔を俯かせて震えていた。外気の寒さではなく、断られ、拒絶されることへの恐怖や、溜め込んでいた想いのすべてが彼女の中でぐるぐると渦巻いているが故に。

けれども、グランからの返事はなかった。

やっぱり断られちゃうのかな、迷惑なのかなと、マイナスの思いが胸中に巡りかけよ

うとしたところで――

「ひゃつ――?」

不意に、彼女の身体を覆うようにグランが抱きしめてきたのだ。

力強く。けれど痛くないようにどこか優しく。突発的に行われたグランの抱擁にセ
ンがあたふたと困惑していたら、彼は否定をしながらもこう言ってくる。

「……セン。努力なんて、しなくていい。頑張らなくていい。」

センは、センのままできてくれ。そのままの君の姿で、僕の隣にいてほしい」

それは無理にでも背伸びをして、グランと対等な立場でありたいとするセンに対して
の否定の言葉であり、ありのままの彼女を求める彼の素直な気持ちだった。

「センは、僕の背中を預けられるくらい強いよ。だから、これ以上頑張ろうとか、無理し
ようとかは思わないで。無理に変わろうとすると自分に疲れちゃうし、それは僕も痛い
くらい分かっているからさ。もし自分にダメなところがあるのなら、少しずつでいい。
ゆっくりでいい。時間をかけていっしょに直していこう」

グランも団長であるが故に、これまで幾度となく苦難に見舞われた。

ジータと共にやっているとはいえ、大所帯を纏める騎空団の団長であり、その重圧は
とてつもないほどだった。初めの頃は失敗続きで自己嫌悪の毎日であったし、自分より
も優れた人間なんて山ほどいると自虐していたこともあった。けれども、それでも背伸

びすることなく真面目に続けてきたから今のグランが居るわけで、だから彼女——センにも似たような過ちをおかしてほしくなかった。

頼れる仲間たちがいたから、今の自分がいる。

一人で解決を臨むわけではない、確かな信頼を築けていたから——これまでがあり、今がある。

しかし。それとは別に。グランもまた、抱いていた想いを口々に綴る。

募った感情に背中を押されるように、彼も——センに向けて告白した。

「良かった。本当に、良かったよ。嫌われてないってわかって、センの気持ちを知ることが出来て。」

僕と……同じ気持ちだったって、分かることが出来て」

「……え？ グラン、さん？ それ、って……」

「日向ぼっこしながら、ひよつとして意識されてないんじゃないのかなって不安になってた。もしかしてこの感情も、独りよがりの空回りな想いだったのかなって思い始めたからさ。これまで色々あったけど、センの本心を聞けて良かった。」

——僕も、センが好きだ。きつとあの時、山道ではじめて出会ったときから、センに惹かれてた。そばにいて、こんなにも温かな気持ちになるのは初めてだった。だからセンに避けられていたのを知った時、怖かった。いつもそばで感じていたぬくもりが、無

くなってしまうんじゃないのかって思つて。

離れて分かつたんだ。一人がこんなにも心細く感じるなんて」

それは、ほかの人に言わせれば短いくらいの離れた時間だったけれど。

お互いの気持ちを理解しあえるには十分な時間だったらしく、それだけグランとセンが一緒にいた今までの時間は、長くて尊い物だった。いつもと違う相手の一面を見て、困惑して、戸惑つて。そうして気が付けた。好きだという気持ちを。心の海底に沈ませていた宝物を。

ぎゅ、つと抱きしめる力が強くなる。触れ合う身体から伝わる体温が直に伝わって、鼓動が逸る。

しかし、それを恥ずかしいとは思わない。こんなにもドキドキするくらい好きなことは間違いいではないから。否定も、拒絶もない。そこにあるのは一途に伝わってくる慕情だけだ。

「——聞こえますか、わたしの鼓動。グランさんに抱きしめられているだけで、こんなにも早くなるんです」

「——ああ、聞こえるよ。センの心の音。僕と同じくらい早い。」

最初から、こうすれば良かったんだ。こうやってしつかり抱きしめておけば、すれ違うことなんてなかった。不安になることなんてなかった。センを知ることが出来てた

んだ」

それは後悔にも似た言葉ではあったが、語るグランの声色に暗さを彩る雰囲気は感じられない。

こうやって分かり合えたから、それでいい。今、お互いの本音を知ることが出来たから——それでいいんだと、納得した様子であった。そんなグラんに、センは少しだけ顔をあげる。

「あの、グランさん。……三つ目の、最後のお願い、訊いてもらってもいいですか？」
少し遠慮がちに、こう言ってきた。

「お願い？ ……ああ、ユグドラシルのか。いいよ、何をしたらいいかな」

「はい。えっと、ですね……グランさん。えと、その、わ、わたし、に……」

そう言いかけてぐつと口を噤む。「？」と首を傾げたグランに対して、センはまだ心の準備が出来なかったのか、ちよつとだけ苦い顔をして目を瞑り、そして——
「き、キス、して、ください……」

真つ赤な顔で震えながら、くいと顎を上げた。そんな積極的なセンの行動にグランは一瞬だけ面食らうも、覚悟した彼女の行為を蔑ろにするのはよくない。そう思い、意を決してグランはセンの肩を抱き、ゆつくりと顔を近づける。グランの吐息がセンの頬に当たり、びくりと彼女が反応する。触れ合う距離に、彼はいる。ドクドクと鼓動が激し

くなって、全身が熱く燃えるように熱を帯びている。

「グラン、さん……」

切なく名を呼ぶセンにグランの心臓もまた激しさを増していた。

誰かが見ている、なんてそんな余裕も考えられず。緊張で頭が真っ白になりそうな状況でグランは――

「……んっ」

ちよつとだけ突き出してるセンの唇ではなく、彼女のおでこに、そつと唇を当てた。予想外の場所にキスされたことにセンは一瞬だけぼかんとした表情を浮かべたが、すぐに

「……むう……グランさあん」

口元をとがらせて、少し拗ねた調子で言ってくる。確かに場所は指定していなかったけれど、これはあんまりではないだろうか。そんな思いを秘めた瞳（ジト目）でグランをじーっと睨むも、彼は話題をすり替えようと、次にセンから発せられるであろう言葉を前もって遮った。

「……さ、さあ。も、もう夜も遅いし寝ようか。問題も解決したし、明日からはいつも通りの僕らでいよう。ほ、他の人たちに心配されるからね」

「……はあ、」

上ずった声のグランに対して、センの声はどことなく落胆が見えている。肩を落としてとぼとぼ歩く彼女は明らかに納得のいつていない様子だったが、これで良かったんだとグランは思った。

——いつも驚くようなことばかりして。突拍子もないことをやってのけて。

その度にこちらはハラハラして心配してきたから。今度はこちらから驚かせてやろう。

グランはそんな子供っぽい意地悪な思考を胸に宿しつつ。

手を繋いで甲板から廊下へと降り立つ前の場所で、ぴたりと足を止めた。

「——セン」

「はい？ グランさん、なんででしょう、か——」

しっかりと握っていたはずの指を絡めて。何だろうとこちらに振り向く彼女に向けて、グランは小さな笑みを浮かべると——流れる前髪を少しだけはらって、センの唇を唐突に塞いだ。

それは、先程とは違い意を決した——感情のこもったものだった。

会話を続けようとした彼女の眼が大きく見開かれる。戸惑い、焦燥、驚愕、それらすべてが入り混じった何ともいえない顔で間近に映るグランの顔を見つめていたが、暴力的ではない優しい唇の感触に蕩けるような夢心地を感じて、センは頬を紅潮させながら

もゆつくりと瞳を閉じた。

唐突ではあれども、触れ合うそれからグランの想いが確かに伝わってきて、不満に色めいていたはずの心が、いつの間にか感じたことのない幸せに浸っていく。

きゅつ、と絡めた手に力が込められる。離したくない。もつと触れ合っていたい。心の奥底から溢れ出す愛しい気持ちに気付き、その感情の赴くままに自分の身体を預けようとしたが——そんな彼女の想いとは裏腹に、グランは自分の唇を静かに離した。

風が触れる自分の口元がやけに寂しさを訴えていて、それが彼女をハツと我に返らせてしまう。

一体、自分は何をしようとしていたのか。衝動に身を任せて何をしようとしていたのか。

朱色に紅潮していたはずの頬は見る見るうちに顔全体へ広がって真っ赤に染まり、ぴんつと立っていた耳はへなへなと折れて沈んでいく。グランの手を離し、センはきゅつと自分の垂れた耳を押さえながら不満を零した。

「……………ふあ……………あ、あうう……………そういう不意打ち、ずるい、です……………心の準備できてないのに、ずるい、です……………」

垂れた耳で自分の顔を隠して恥ずかしそうに俯く。

その耳すらも赤く彩られていたので、頭隠して何とやらの状態ではあるが。

「あはは、ごめんごめん。でも、今まで振り回された分の仕返しだよ。これくらいは許してよ」

月夜に照らされ、銀色に煌くセンの髪をぼふぼふと撫でながら、グランが闊達に笑う。してやられた。と、ほんのちよつぱり悔しい気持ちになりながらも、心のうちは彼に對する想いで溢れかえっていて、純真な微笑みを見せるグランにつられて、センも小さく笑った。

しばらくの間微笑ましい雰囲気は二人の間で流れていたが、

「——じゃあ」

その代わりに。と付け足してセンが言葉を続ける。

垂れていたはずの耳が意思を持つようにぴんと大きく立った。

「許してあげますから……もう一度、見せてください。あなたの気持ち。今度は逃げずに、受け止めますから」

——ん。と少しだけ顎を上げてもう一度センは瞳を閉じる。それが何を意味しているのか、分からないはずもないグランは——彼女の肩を抱いて、もう一度センと口付けを交わした。グランの抱擁が温かくて、心地よくて、優しくて。身体を寄せてセンはグランの背中に手を回した。

大きい背中にしつかりと自分の腕を回して、ぎゅつと抱きしめる。温かい。こんな温

かな気持ちやセンは感じたことがなかった。心も、身体も、すべてを包み込んでくれるような温かさは初めてだった。こんな気持ちを教えてくれたグランが——センは好きだった。

唇を離すと、グランの眼にセンの顔が映る。上目づかいで見つめてくる彼女が愛しくて、その頬にそつと手をあてがうと「……にやあ」と猫のように小さく鳴いた。

その感情は、まるで猫のように自由気ままに動き続けていたけれど。

それでも、ようやく捕まえることができた。逃げ惑い、行き場を失った否定は肯定に変わり、ありのままの想いを大切なものに変えた。心の変容に怖れ、怯え続けていたあの頃の自分はいない。

誰かに言われるわけでもない自分の本音を包み隠さず伝えて、ようやく変わることができたのだ。

弱気に移ろい、駆けていたはずの身体と反して、立ち止まり続けていた心はようやく動き始めて。

培っていた憧れが、恋色に染まる。

誤魔化しを捨てた素直な性格が陽だまりを見つけるように——幸せを、ようやく見つけた。

灰色の空が終わりを告げて。

茜色に色がついた、奥ゆかしくも綺麗な世界で彼女は――

「……えへへ、好きです。大好きです、グランさん」

つらくて悲しい時間に別れを告げ、あどけない瞳を煌かせながら。ちよっとだけ首をかしげて、天使のような笑顔を見せたのだった。



陽だまり色のセンチメンタル

センの爆弾発言が誤解であると周囲に知れ渡ってから幾日が過ぎた。初めは喜色満面にからかつていた団員たちも真相を知ってからはずまらなそうに踵を返し始め、騒然としていた騎空団内もようやくやくいつも通りの落ち着きを取り戻していた。誤解の先陣に立っていたジータも事実を知って普段通りに戻っていたし、関係の亀裂を危惧していたグランも肩の荷を下ろすことができていた。

——はずだったが。今度はそれとは別件で、新たな問題に直面していた。

センの同衾を小耳に挟んだ団員たちが、グランと寢床を共にしようと台頭し始めたのである。

夜に忍び込んでくるものは未だにいないものの、我先にと先陣を切って「グランちゃんグランちゃん！ 今日はお姉さんと一緒に寝ようね！」と寝間着姿のまま現れる剣豪も居れば「騎空団の団長たるものが一人で眠れないとは情けない……が。団長の重責は私もよく知っている。来い、貴様の不眠を改善してやろう」と、妙に母親気質で部屋に入ってくるダークドラゴンの団長もいて、最終的には「あ、あの……最近寒いし、布団、温めようかなって……そ、それに私、あなたになら——ってあああああごめん

「さいやっぱり無理いいい！」と何をしに来たのか。真つ赤な顔でそれだけ言って逃走した燃ゆる紅の踊り子もいる始末。

結局のところ問題は改善されたところか、悪化の傾向に辿っているような。

そんな思いを胸に秘めつつ、毎夜訪れる女性団員たちのアプローチを受け流す日々のグラン。

エリクシールを呷りながら執務に励む彼の目元にはうつすら隈が浮かびあがっていた。

状況が状況だけに副団長に悲痛な声で助けを求めると、ジータからは「自業自得だよ、グランが優柔不断なのが悪い」としかめつ面ではつきり切られてしまう。少し楽しげに言い放っていたのは、彼女なりの悪戯心か。

不憫に思ったカタリナやルリアたちが件の団員たちに呼びかけるも、それでも数は減らずむしろ如何にしてグランにOKを貰えるか、会合を開いて作戦会議まで行う始末。愛情や庇護欲はあれどもそれ以上は求めていない（例外もある）者たちだから質が悪いし、逆にその状況を利用して「グランと添い寝券（無許可）」とやらを発行して売り捌こうとした不届きものまでいた。流石にそれはジータによる鉄拳制裁で事前に押収したが、集めたチケットの中から「カタリナと添い寝券（もちろん無許可）」まで出てきて、それを発見した某アルピオン城主が狂気に満ちて大暴れした日もあった。

男性騎空士たちはそんな状況のグランに羨ましがりつつ、連日続くドタバタな日常に彼が振り回されているのを遠目で楽しんでいた。完全に他人事であり、助ける気など微塵にもない。むしろ助けようものならこちらに害を被る可能性だってあり得る状況だ。間違い等が起きないように気には止めつつ、各々が静観を続けていた。

そんな状況であるが故に、センとのお昼寝の時間はグランにとつて唯一の癒しとなっていたのか。

前と同じように甲板で毛布を広げたと思えば、間髪入れずにグランはセンの隣で寝息を立てていた。

「むう……：グランさん、最近直ぐに寝てしまつて、つまらないです……」

こちらから日向ぼっこを提案しただけに、それについての文句は正直なところお門違いである。

けれど少しおしゃべりがしたかったであろうセンは行き場のないもどかしさを抱えながら、熟睡しているグランの顔をまじまじと眺めていた。隣で眠るグランの表情は安らかな笑みに満ちており、戦闘に臨む毅然とした態度とは裏腹に、子供っぽさを滲ませた年相応の少年の寝顔に変わっている。そんな彼の幸せそうな顔を眺めて、センは小さく笑った。

本当は日向ぼっこしながらお喋りして、そのまま眠りたかったんだけど。

彼の寝顔を見ていたら、何だか微笑ましい気分になってきて。そんな気持ちのまま眠れることが出来たらどれだけ幸せだろうか。そんなことを考えつつ——センもまた、グランの隣で身体を横にして彼に密着した。汗臭くない爽やかなグランの匂いが鼻腔をくすぐる。ぎゅ、つと抱きしめるとあたたかな体温が直に伝わった。気持ちいい。まるでお日様を抱きしめているような、そんな錯覚にセンは溺れていく。

抱き枕のようにグランを抱きしめながら幸福な気持ちに浸りつつ——

「は、離れないように……マーキング、です……」

ぼふぼふと彼の首元に自分の頬を当てて、まるでわが物のようにセンが甘え始めた。

匂いをこすりつける猫のような行動に、起きていればきつとグランは苦笑していただろう。

彼の首元に頬や頭をこすりつけながら、少しの悪戯心で軽くキスをする。後々になってグランの首元にキスマークがあることを知った団員たちがまたも騒然を叩き付けんが故に大暴走するのだが——この時のグランとセンはそんなことなど露知らず、幸せな日向ぼっこを満喫していた。

想いを伝えたけれど、さして彼らの日常に劇的な変化はない。

けれどもお互いの心の距離は確かに縮まっていて、これから少しずつ、苦難しながらも二人は穏やかな時の中で惹かれ合っていく。黒い感情が生み出した心もまた自分の

一面であり、否定もまた大切な感情。それらを受け入れることによって——センはまた、新たな想いを抱くことができた。

悲しんで、苦しんで。

そして愛して、愛されて。

たくさんさんの想いに、そして陽だまりに包まれながら——

「えへへ……身体も、心も、あつたかいです、にゃ」

大好きな人と共に歩めることを、夢心地のように噛みしめるのであつた。

更なる晴天に向かうため、雲間を切り裂きながらグランサイファーが空を疾駆する。団員たちの様々な感情を交錯させたまま、この騎空艇は目的地である星の島「イスタルシア」めがけて舵を切っていく。

これは、そんな団員たちのごく一部の日常の風景であり。

苦難、苦悩を繰り返しながらも不器用に心を紡いでいく彼らの物語。

これは、淡い恋模様を抱いていたセンの——

心の隅で隠れていた、陽だまり色のセンチメンタル。

陽だまり色センチメンタル
f i n